

地域映画祭の明日を考える  
～ マーケットとしての可能性とは ～

平成19年11月

経済産業省  
東北経済産業局



～ 目 次 ～

1	開催概要	-----	1
2	パネリスト略歴	-----	2
3	シンポジウム概要	-----	4
4	アンケートから	-----	12
5	広報用チラシ	-----	16

# 1 開催概要

- 【日時】 平成19年10月8日(月・祝) 15:20～17:30  
【会場】 映画館「フォーラム5」 (山形市香澄町2-8-1)  
【主催】 東北経済産業局  
【入場者】 109名

## 【開催趣旨】

現在、東北地域では特色ある様々な地域映画祭が開催されています。地域映画祭は、これまでどちらかという地域文化振興的な性格が強く、行政の手厚い支援を受けられる場合も多かったのですが、近年は自治体の財政事情の悪化等を背景に、人的にも財政的にも自立した運営が求められつつあります。

一方、地域映画祭は映画産業の人材育成の場、配給につながる市場としての機能を潜在的に有しています。こうした機能を充実・発展させることは、映画祭の自立的運営に留まらず、地域のみならず全国のコンテンツ産業の振興にも資するものですが、映画祭の運営当事者や一般市民には、その認識は極めて薄いと云わざるを得ないのが現状です。

このため、各地の地域映画祭運営当事者や一般市民の意識を喚起し、地域映画祭の機能強化を図ろうと、地域映画祭のあり方、特に市場性について考えるシンポジウムを開催することとしました。

更に、このシンポジウムを管内地域映画祭の中でも注目の高い「山形国際ドキュメンタリー映画祭」の期間中に開催することにより、その効果を高め、東北地域のコンテンツ産業の振興に資することとしました。

## 【パネリスト】

(順不同・敬称略)

- |      |                       |
|------|-----------------------|
| 池谷 薫 | 『蟻の兵隊』監督・プロデューサー      |
| 伊勢真一 | 『花の夢 ある中国残留婦人』プロデューサー |
| 安岡卓治 | 『ガーダ パレスチナの詩』プロデューサー  |
| 川嶋大史 | @ f f あおもり映画祭 本部事務局代表 |
| 高橋卓也 | 山形国際ドキュメンタリー映画祭 事務局長  |

## 【司会】

- 藤岡朝子 コーディネーター(創人舎)

## 2 パネリスト略歴

(順不同・敬称略)

池谷薫 (『蟻の兵隊』監督・プロデューサー)



第二次大戦敗戦後も中国に残留し、内戦参戦を強いられた日本人兵士たちの現実を描いた『蟻の兵隊』は、東京渋谷の映画館の興行記録を塗り替える大ヒットとなり、自主上映の申し込みが全国から殺到。海外の国際映画祭でも好評を博し、カナダで劇場配給が始まった。池谷監督はNHKの番組制作を経て、自主制作・自主配給の劇場公開映画を志向した。

伊勢真一 (『花の夢 ある中国残留婦人』プロデューサー)



監督として『奈緒ちゃん』、『ルーペ』、『朋あり～太鼓奏者林英哲～』など多くの作品を作る一方、『タイマグラばあちゃん』(澄川嘉彦監督)、『めぐる』(石井かほり監督)、『花はんめ』(金聖雄監督)、『ツヒノスミカ』(山本起也監督)など若手ドキュメンタリストのプロデュースを続ける。2003年来、大阪市の阿倍野ヒューマンドキュメンタリー映画祭企画委員長を務める。

安岡卓治 (『ガーダ パレスチナの詩』プロデューサー)



日本映画学校の教員として『あんにょんキムチ』(松江哲明監督)『home』(小林貴裕監督)など学生の作ったドキュメンタリー作品の一般公開に尽力する一方、オウム真理教を内部から描いた『A』『A2』(森達也監督)、テレビ報道では伝わらない戦時下のイラク市民を見つめた『リトルバース イラク戦火の家族たち』(綿井健陽監督)、パレスチナの女性の生涯に寄り添う『ガーダ パレスチナの詩』(古居みずえ監督)など話題のドキュメンタリーを積極的にプロデュース。世界の映画祭事情にも詳しい。

川嶋大史（@ f f あおもり映画祭 本部事務局代表）



広告制作会社、映画制作会社、テレビ局勤務を経て、1988年に青森県へUターン。新聞販売店経営の傍ら、各種地域づくりに参画する。縄文、格闘技、映画、ねぶたと青森県をテーマに様々なイベントを企画・運営する。平成3年度毎日郷土提言賞優秀賞受賞。1991年より「あおもり映画祭」を主宰。2007年「@ f f 第16回あおもり映画祭」より、全国的にも珍しい全県的なネットワーク組織に移行する。青森県内5フィルムコミッションを含む全15団体が加盟する実行委員会の本部事務局代表を務める。

高橋卓也（山形国際ドキュメンタリー映画祭 事務局長）



1989年の第一回目山形映画祭からボランティアスタッフとして中心的な役割を担い、2005年より事務局の正規スタッフとして映画祭の常駐となる。映画祭がNPO法人となった2007年春より「非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭」の事務局長を担当する。

### 3 シンポジウム概要

**池谷薫さん、ドキュメンタリーは、映画祭はビジネスになりますか？**

『蟻の兵隊』を始め、長編のドキュメンタリー映画を劇場公開する道を選んで来られた池谷さんにお聞きします。コンテンツ産業における市場性、映画祭におけるマーケットとしての可能性をどのようにお考えですか？

**「大切に向かい合って、情熱を持ってやれば、やっていける」**

池谷：ドキュメンタリー映画制作をやっていると、よく「食べていけるんですか？」と聞かれますが、確かに、映画を1本作ると約3年は無収入。その間かみさんから3回位離婚届を出されます。でも、何とかなるんですよ。例えば『蟻の兵隊』は11週のロングランとなり、もう10万人が見てくれています。

ただし、作品の公開にはきちんとした宣伝戦略を立てて進めています。映画制作にかかる相当額の費用を回収するには、一人でも多くの人に見てもらわなければならないからです。

宣伝の仕事は、大ヒット作『踊るマハラジャ』（95年、K.S.ラヴィクマール監督）の宣伝プロデューサーを口説き落としをお願いしました。「あなたに惚れたからやってくれ、やってくれなきゃ困る」と。それから『蟻の兵隊』を見る会」という応援団も、チケットを10万枚配ってくれました。こういう要素がいろいろ加わって、なんとかお客さんに来てもらえた訳です。

大切に映画に向かい合って、一人でも多くの人に見てもらおうと情熱を持ってやれば、ドキュメンタリーでもやっていけるものだと思います。

**「映画祭はビジネスの出会いの場。いろいろ方策を」**

池谷：映画祭は、単に作品を公開するだけの場ではありません。海外から来た映画のバイヤーが作品を見て、どこかで公開してくれるかもしれない。実際、『蟻の兵隊』は昨年カナダのホットドックス映画祭での上映後、配給が決まりました。そういう意味では、映画祭はビジネスの出会いの場もあるんですよ。この「山形国際ドキュメンタリー映画祭」は、日本が世界に誇れる映画祭。だからこれからは、マーケットとしての可能性をもっと生み出すために、いろいろ方策を立ててほしいですね。



**伊勢真一さん、映画祭に、マーケットとしての可能性はありますか？**

若手監督のプロデュースに豊富なご経験を持ち、大阪市阿倍野ヒューマンドキュメンタリー映画祭の企画委員長も務められている伊勢さんにお聞きします。

**「作った映画を見てもらうための映画祭。結果的にビジネスになればいい」**

伊勢：僕は映画制作から始めて、作ったものを見てもらうために、ミニシアター上映、自主上映、それに海外で見てもらうということをやってきました。

ドキュメンタリーの場合、撮影完了後の段階、つまり仕上げ、それを見せるためのとば口を作るのが大変です。でも、一人一人の制作だと難しいことも、仲間と一緒にならできる。僕がプロデュースをやるようになったのはこうした経緯からです。

作ることと見てもらうことは違いますが、創造的な行為という意味では同じ。映画祭の運営もそうです。上映という創造的な行為を行う仲間達と、“身の丈”の映画祭と言うのかな、作りたいという人がいて、見てもらいたいという人がいて、「だったらこのようなプログラムを作ろう」というような、そういう映画祭をやっています。

僕は、経済的にうまくビジネスにできるからやっているのではなくて、映画制作のもう一つの面である“見てもらう”部分をやりたくて、それが結果的に、自分なりの飯の食い方につながればいいかな、と思っているだけです。

## 安岡卓治さん、地域映画祭のマーケットとしての可能性を世界と較べると？

若手の育成に尽力される一方、異業種の作り手によるドキュメンタリー作品をプロデュースし、それらを世界の国際映画祭に出品して来られた安岡さん。日本の地域映画祭の可能性を世界の映画祭と較べて、どうお考えでしょうか？

### 「山形で得た評価が世界市場へのきっかけになった」

安岡：『A』（97年、森達也監督）という作品を例に取ってお答えしましょう。この作品を「山形国際ドキュメンタリー映画祭」で上映していただいた後、いろいろな議論の輪が広がりましたが、驚いたことに、ベルリン映画祭のフォーラム部門から招待を受けました。山形で作品が評価、認知されたことが直接のきっかけだったのでしょう。非常にありがたいことです。この映画祭は海外の映画祭につながる、世界に開かれた窓だったのです。

「山形国際ドキュメンタリー映画祭」が直接的にマーケットとなり、商品が動くわけではないのですが、国際性を大事にしたプログラムが世界的な評価を得ていて、エントリーされた作品が海外に出て行くようにできているんでしょうね。映画祭が作品をどのように評価していくのか、そしてその価値をどのように広げていくか、という視点で考えると、非常に大切な役割を果たしていると思います。



### 「作り手の成長が、映画産業の成長に繋がる。映画祭は作り手育成の場」

安岡：『ガーダ パレスチナの詩』（05年）の古居監督も、「とにかく山形に出したい」と言っていました。作り手にとって、作品を認知させる場所として、この映画祭は非常にいいと思います。

『A』の森監督も、出品している若手や学生も同じだと思いますが、「自分達が渾身の力を込めて作ったこの作品は、果たして本当に見られるも

のだろうか」と不安でいっぱいなわけです。上映しながら、厳しい批評や意見をもらうことは、次作に繋がるし、そういう作り手が育つことによって、産業として成長していていると感じています。

『蟻の兵隊』や『ヨコハマメリー』（05年、中村高寛監督）の大成功から、今、国内の興行界では、ドキュメンタリーが非常に注目されているんですよ。だからこそ、こうした映画祭をスタートラインにして、発信し、作家を育てていくという環境はきわめて貴重なものだと思います。

### 高橋卓也さん、映画祭の経営戦略をお聞かせください。

「山形国際ドキュメンタリー映画祭」事務局長の高橋さんに伺います。映画祭は公共的文化事業と捉えられがちですが、経営的に成り立たせることもまた不可欠です。その戦略をどのようにお考えでしょうか。

### 「作り手を身近に感じてもらい、ドキュメンタリーを地域に普及させる」

高橋：自身の体験に則して言うと、ドキュメンタリーを地域に普及させていくのは、かなり困難でした。受け手、つまり観客がなかなかドキュメンタリーを受け入れられない状況でしたから。ただ、普及の過程でこちらも鍛えられましたし、地域も活性化しました。

地域で上映するということは、地域の人が、観客側から見せる側に立つということ。これは大変なことです。まず自分が作品の魅力を認識し、自分の中で言葉を見つけ出して、「この映画がいいからぜひ見てください」と薦め、普及していくのです。焦ってはダメ。人から人へバトンタッチする時間をたっぷり取って、その関わりの中で作品を広げていくことが大事だと思います。

また、より多くの人々が介在して普及する方が、観客に、より近い距離感で見てもらえます。薦めるのが知人だとか、もぎりをするのが近所のおじちゃんだとか、そういう、作り手を身近に感じさせることが、ドキュメンタリー映画の一つの普及の方法ではないかと考えています。

### 「補助金も使いやすい制度に変えて、現場の瞬発力を」

高橋：この映画祭を山形市の事業として開催していた頃は、お金を使うにもいろいろな手続きが必要でした。けれども、お金を使う時には、いろいろなチェック機構を働かせて慎重にやるべき時と、気運が高まった時に瞬時にやるべき時とがあると思うんです。もちろん行政に援助はしていた

だきたいですが、現場を動きやすくするために、制度も変わってほしいですね。

今回から事務局がNPO法人となって、県内で資金集めをしたのですが、企業によっては「山形市がついているから（関わらなくて）いいんだよね」と言う方もいたんです。今後は、事務局が民間団体として企業と関係を作り直すことで、いろいろな方達が経済的にも人的にも関わられるようになるという実感は持っています。そのためにも、自分達が出かけて行って、観客も出資者も掴んでくる必要はあるでしょう。

こうした地域映画祭や自主上映では、観客が製作者に「自分達にやらせてほしい」と直接連絡して、製作・配給・上映・鑑賞の間にある壁を飛び越えてしまいます。これは活性化のために非常にいいことですね。

### 川嶋大史さん、経済効果を意図した映画祭構想とは？

青森県で県内連携タイプの映画祭をフィルムコミッションと連動して運営している川嶋さんにお聞きします。

**「自分達で上映するしかない。お金をかけず、無理もしないで」**

川嶋：「あおもり映画祭」は、15～16年前のビデオ全盛時代、映画館がどんどん潰れ、見たい映画が地方、特に青森には来ない中、「自分達で上映するしかない」と始めたものです。

首都圏の感覚で100万円、200万円の協賛金は簡単に集められると思っていましたが、ちょうどバブルがはじけた頃で、10万円も出してくれない企業ばかり。県も市も後援はしてくれても、お金は全然出してくれない。如何に金をかけないかに知恵を絞りました。

僕が映画製作会社にいた頃の人脈を使って、ゲストに来ていただいていたのですが、温泉付きで美味しいものを食べていただき、印象を残そう、と思ったのです。15年間で200人以上のゲストが来てくれて、「青森はいいね、1回ロケで来たいね」という話がだんだん広がり、この4～5年でロケ作品が急増しました。

青森県は高いビルもないし、無駄な電線もないし、昭和30～40年代のロケができる場所がいっぱいあります。それが気に入っていただけたこともあり、これは田舎に徹するしかないと思い、「青森は日本の田舎です、どんどんロケに来てください。美味しいものを食べさせるし温泉もあります」とPRしています。

**「地域愛で人を呼ぶ。人が来れば経済が動く」**  
川嶋：青森県内では、以前「中世の里 なみおか映画祭」という素晴らしいプログラムの映画祭があったのですが、なくなってしまいました。あまり話題にならないような小規模な作品を紹介していけるのが、映画祭の良さ。地域映画祭がなくなるといことは、その地域にとっていろいろな意味で非常に大きなマイナスになると思います。

今まで、有名な俳優さんも厚意で青森に来てくれましたが、僕が目指すのは一過性の、ゲスト目当てではない部分。地域愛や、地域に人を呼び込みたいという地元のエゴです。人を呼び込めば、宿泊施設にお金が落ち、地域経済が動きます。そのためにも、高度な映画ファンだけの集まりにならないように、バランスを取ってコーディネートしなければなりません。これから各地の映画祭を勉強して、もっともっと面白い映画祭、面白い地域にしていきたいと思っています。



**映画祭による地域活性化という観点から、アドバイスをお願いします。**

会場には、奈良で国際映画祭を立ち上げようと準備委員会を始めた方が来場され、アドバイスを求めました。

**「映画作りを通して、皆で取り組む喜びと責任感が生まれた」**

池谷：僕が育った福島県白河市では、平成に入って映画館が全部閉館してしまいました。地元の後輩が一念発起して「白河シネマフェスティバル」という映画祭を始め、4回目を数えましたが、今年ちょっと面白い試みをしました。

福島市が中学生を対象に行っている映画制作のワークショップ（編注：「こむこむ映画<sup>シネマ</sup>倶楽部<sup>クラブ</sup>」）がありますが、そこでは皆でシナリオを考え、撮影し、編集して、一本の映画を作ります。白河の映画祭に、その中学生の代表と日本映

画学校の学生監督、それから僕も呼ばれてディスカッションをしましたが、なかなか刺激的でしたよ。

映画って皆で作るものでしょ。中学生の目がキラキラしているんです。それに、責任感も生まれるんですね、決められた役割は果たさなければならぬから。追い込まれて、泣きそうになりながらも、がんばって、歯をくいしばって。中学生から映画作りに取り込んでいくというのは、非常に面白いと思いました。

### 「映画祭を離れた活動から、スタッフも活性化するんです」

高橋：映画祭をやるためには、映画祭だけをやっているだけではダメですね。地元の観客を育て、常に関係を繋いでいかないと。

映画祭をやっていない時期には、スタッフが子供達にアニメーションの作り方を教えています。すると、普段は接触のない子供達と接することで、スタッフが活性化するんです。ほかに、映画祭以外の映画を上映したり、よもや自分が映画を作ることはないと思っている人に作ろうと提案したり。それはすごく素敵なことですし、何よりスタッフが活性化します。山形もやりますから、奈良もぜひ一緒に！

### 映画祭のあり方について、もう少し具体的にお聞かせください。

奈良からいらした来場者から、川嶋さんの「高度な映画ファンだけの集まりにならないように、バランスを取ってコーディネートを」という発言に対して、もう少し詳しく聞きたいとの声が出ました。

### 「映画祭以外の時期のイベントで観客の反応を見て、路線を考えています」

川嶋：「高度」と「低度」に基準はありませんが、映画ファンにとっては当たり前の知識を、ほとんどの人が知らなかったということがあったので、そこは気を付けています。映画祭のない時期は映画館に働きかけて話題作を上映してもらったり、イベントを仕掛けたりして、観客の反応を見て、どんな路線でいくか考えています。

奈良の場合、歴史がありますから、特化したテーマに絞ることもできると思いますが、経済的に成り立つかどうかは難しいのでは。テーマを特化することで、世界に類のない映画祭になるかもしれないし、「奈良県民映画祭でいいんだ」と割り切ってもいいと思います。

それと、奈良という地域の魅力をうまく活用するというのは大事ですが、映画をきちんと上映する環境も大切です。一度、青函トンネルの中で「海底映画祭」と題して開催したんですが、「やっぱりちゃんとしたところでやろうよ」と言われました。映画はちゃんとした場所で見せたいな、と思います。

来場した河瀬直美監督からは、「なら国際映画祭」準備委員長としての立場からもコメントをいただきました。

### 「地域の人と交流して、来場者に体験を持ち帰ってもらうことが大切」

河瀬：映画は映画館で見るのがもちろん王道ですが、奈良では屋外上映をしたいなと思っています。

というのは、映画祭に招かれた時には、その地域の人と交流して、上映地域で暮らしている人達の日常を知ることがとても大切だと思っています。東大寺の横に住む人の映画を見て、青森の観客が自分達の地域と照らし合わせて「僕らのところには青函トンネルがあって」というように、一緒に話し合っ、そして認め合えるというようなところから文化というのは創造されるのではないのでしょうか。そういう意味で、お寺の匂いがしたり、世界遺産の中の森の気配が漂ってきたり、東京とは全然違う暗闇があったりする中で、星を見ながら、地域の美味しいものを食べたり、鹿とたわむれたりして、その体験を持ち帰ってもらうことが、そこから先の交流の窓口となるのです。

### 「経済効果は20年先、50年先」

河瀬：子供達が映画制作のワークショップを体験しても、その成果は例えば数日で現れるものではないでしょうか。20年先、50年先に経済に結びつくのではないのでしょうか。今この瞬間よりも、少し先を考える。地域が長期的な視野でがんばれるように、経済産業省が支援してくれるのではないかと思います。

「なら国際映画祭」が目指しているのは、まずプログラムがプロフェッショナルであること、作品の質が高いこと、そして、地域の人々がしっかり参加していくこと。それから国際観光文化都市・奈良の窓の一つになれるように、海外からのお客さんにたくさん来てもらうことです。ですからコンペティション部門を設置し、ワークショップも開き、特集上映もやりたい。山形はライバルにもなりますが、同じ日本の映画祭として一緒に連携していけることもあるのでは。

**「たった一日でも、小さくても映画祭。刺激と出会いの場を、いろいろな町で」**

**伊勢：**僕は野球もサッカーも好きですが、子供の頃、野球をやろうと言って仲間が集まったのと同じ感覚で映画を作ってきました。映画祭もそういう感じがありますよね。声をかけた人から次々仲間が集まるというように。大きな映画祭も必要ですが、日本中のいろいろな町で、たった一日でもいい、小さな映画祭がたくさんできるといいと思います。

地域経済や映画産業という視点も大事ですが、自分の役割は「作りたい」「見せたい」という刺激を与えることだと思っています。子供映画教室を開催すると、参加した子供に大きな影響を与えられますが、「映画監督になりたい」という子供が出て、教えた方も非常に嬉しそうでした。どんどん刺激し合い、出会いが生まれるような、その仕掛けができればいいと思います。



**「目先の経済性で判断して『世界に開かれた窓』を失うな」**

**安岡：**先程「山形国際ドキュメンタリー映画祭」を「世界に開かれた映画の窓」と言いましたが、その窓を広げて世界の評価を獲得するまでには、歴史を重ね、スタッフが努力を積み重ねてきたと思いますし、それを山形市という地方行政が支えてきたということは非常に大変なことだと思います。

ただいろいろ資料を見ると、今とても厳しい状況にあると。ようやく生まれたこの窓をどう守っていくか。目先の経済性で判断して、映画祭への財政的な支援を絶ってしまうと、せっかく築きあげた財産を一気に失ってしまいます。これは極めて重大な問題だと思います。

**「事務局が民間になったことで生じる段取りの悪さも」**

**河瀬：**「山形国際ドキュメンタリー映画祭」には95年から参加していますが、通りに映画祭のフ

ラグがないなど、今年はまち並みが少し寂しいですね。財政的な影響ですか。

**高橋：**フラッグを掲示するためには、計画を提出して、国の許可をもらうという手続きが必要です。今回、事務局が民間団体になったことで新たな業務が増え、手続きを取る余裕がなかったのです。また、市の補助金の額は減っていないのですが、市の職員による業務面での補助が全くなかったことで、民間ボランティアや有償のサポートスタッフの人件費や会場費も新たに掛かっています。そういう意味では、実質的に使える費用は少なくなっています。

**「映画祭は、地元の人に喜んでもらうこと、広く参加してもらうこと」**

**伊勢：**映画祭に地域の人とはどれ位見に来ているんですか。

**高橋：**細かい統計は取っていませんが、参加者全体の約28%が山形市民と言われています。この数字が多いか少ないかは見方によって全然違うところで、極端に少なくもなく、悲観的に捉えてはいません。ただ、まだ開拓の余地がある、ドキュメンタリーの面白さを伝えきれていないとは感じます。

例えば、自分の町内から何人来ているかとすると全然来ていないんです。ドキュメンタリー映画の、水準が高い、敷居が高いというイメージを払拭できていない。市民参加などということよりも、面白いことをやって地元の人に喜んでもらうこと、それを次の映画祭に繋げるかを考えています。

映画祭の開始当初から、僕達には山形市のイベントだという意識があまりなくて、山形県内で上映活動をしている人に参画してもらうことを目的に、県内数か所を巡回してイベントもやっていました。そういう意味では山形市民の参加人数だけを気にしても仕方ない。むしろもっと広いフィールドの中で関係性を作って、映画祭に参加してもらうことや、自分達の地域で上映活動を行う人を開拓することが、最終的には映画祭の利益になると思います。

**「ネットワークを作り、協力し合う、その繰り返しから面白い展開が広がる」**

**川嶋：**僕の場合は、映画館を貸してくれる興行者側と仲良くすることを大事にしています。フィルムコミッションは、映画の誘致に僕らが協力する形で、映画祭に巻き込みました。僕が主宰する「@ f f あおもり映画祭」には現在、15団体が所属しています。青森市に限らず、青森県各地の団体がネットワークを作って協力し合う、その繰り返しで面白い展開が広がってきているのです。

僕らが少ない予算で映画祭を運営できているのは、各地のフィルムコミッションから予算を少しずつ集められるから。ですから映画祭をやらない時期の活動がすごく重要で、“ノミネーション”を取りながら、各地の映画館と映画サークルのあるところ、それから映画館はないけれどロケ地として結構使われているところなどと、15年間かけてネットワークを組んできました。ネットワーク作るには時間とお金がかかります。

あとは後継者を育てています。やりたいという人が企画やゲスト交渉、上映をやって、僕は一歩下がって、お手伝いしているんです。

## 海外へは映画祭をどう伝え、どう呼び込んでいったのですか？

会場から、映画祭の海外PRについて質問がありました。



## 「人材は地元こだわらない。国際的な情報や人脈を活かすこと」

高橋：「山形国際ドキュメンタリー映画祭」はプロフェッショナルの力と、行政が援助してくれるお金と、市民の力でできているのだらうな、と思っているんです。PRに関しては、プロフェッショナル、つまり日常的に海外で活動し、国際的なネットワークを持っている東京事務局が映画祭の運営にきっちり関わって、その情報や人脈を山形の映画祭に繋げてくれています。そのネットワークを通じて作品募集もかけていくと反応もありますし、来場や出品のお誘いもしています。

東京事務局の機能を全て山形で引き受けたいんじゃないかという意見もありますが、私は大反対です。映画祭は山形の人材だけではできないし、やる必要もない。普段いろいろなところで活動している人達がある時期に山形に集まって一緒に仕事することの楽しさというのは、それは素晴らしいものです。やっぱり、情報だけではダメですね。人間関係を作っていくと。来て下

さる方には「あいつのために行ってやるか」という感じがあるんじゃないかと思います。

## 「映画祭の場で海外の映画人に直接コンタクトし、人間関係を作って呼び込む」

安岡：実際にいろんな映画祭に行ってみる、海外の映画人と直接コンタクトし、人間関係を作って呼び込むということが適切だと思います。日本の映画祭で海外の監督との繋がりができるというのは手近なチャンスだと思いますね。

一般のお客さんが海外から訪れるかどうかは、映画祭そのものの価値をアピールできないと難しいのではないのでしょうか。韓国の「釜山国際映画祭」のように国の支援を受けた巨大な映画祭で、マーケットなどいろいろなセクションがあれば、世界の映画人が集まりますが、そこまで大規模な映画祭を実施するのはなかなか大変だと思います。ですからむしろ、どういう個性を映画祭がアピールできるかがとても重要で、かつ難しいところじゃないでしょうか。

## 高橋さん、川嶋さん、若い観客にはどのように働きかけていますか？

会場の参加者から、「観客に若い人、学生が少ないんじゃないかと思うんです。山形市の中高生をもっと呼び込めば、次の観客を育てられるのではないのでしょうか。学校や先生に働きかけていないのですか」との質問がありました。

## 「日常的な活動を大切に、作品を伝えていく」

高橋：子供達が来ないのは、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」の弱点だと思いますし、自分達の怠慢だったのではないかとも思います。

一昨年と今年は中学生が職場体験で映画祭に来てくれて、一緒に仕事をしてくれたんですが、きちんと作品を評価し、文章も書いてくれたので、宣伝チラシを作ってもらいました。子供が作品と出会って、横に、子供同士で繋げていくように、そのチラシは市内全部の中学校に配りました。

今後は、映画祭をやっていない時期にどう子供達と繋がるかと、個々の作品を伝えていくことを課題にしていきたいと思います。まずは「これは面白い、見せたい」「これなら理解してくれるんじゃないか」という映画をピックアップして、これからがんばりたいと思っています。

川嶋：子供への働きかけはまだですが、高校生が監督と一緒に、実際にカメラを操作するというセミナーをやったり、大学・短大の先生方を通して授業の一環で映画祭に来てもらったり、というよ

うな仕掛けをしています。ここ 10 年程は、学生がボランティア参加してくれて助かっているということもあります。

## 地域映画祭、全国の状況に詳しい岩崎ゆう子さんはどう見ますか？

来場した「コミュニティシネマ支援センター」の岩崎ゆう子さんに、全国の地域映画祭の活動状況をお聞きしました。

### 「地域映画祭にもマーケットの可能性はある。国レベルの支援を」

**コミュニティシネマ支援センター 岩崎：**今、国内では、私達が把握しているだけでも 200 近い映画祭が開催されていますが、種類も規模、内容もさまざまです。

今日のテーマである「マーケット」としての映画祭は、おそらく、未公開作品が初めて発表される、本格的な国際映画祭でなければなかなか成立し難いでしょう。国内では、海外から未公開作品を映画祭のために取り寄せ、字幕を制作し、海外からゲストを呼ぶような本格的な映画祭というのは数えるほどしかありません。こうした大規模な国際映画祭と、地域の文化事業として、地域の人へのサービスを主たる目的として開催されている映画祭をまとめて論じることは難しいと思います。

「山形国際ドキュメンタリー映画祭」については、予算規模が一時期の半減に近いと聞いたことがあります。この映画祭は、作り手にとっても、映画好きな人にとっても、とても重要な映画祭なのです。もちろん山形市民にとってもそうでしょう。このような国際映画祭を維持していくことは、地域だけの問題ではなく、国レベルで支えていく必要があるんじゃないかと思います。

各地で開催されている、いわゆる地域振興や文化事業としての映画祭にも、マーケットとしての可能性はあります。単に映画を地域の人に見せるだけではなく、映画そのもののためになるような長期的な展望を持って考え、活動していくこと

子供と映画の関係構築するのも、その一つの形でしょう。で、映画にとっての状況が大分変わるかもしれないと思いました。

コミュニティシネマの関係者の多くが、子供と映画をどのように繋げていくかに関心を持っています。安岡さんの日本映画学校が関わっている「しんゆり映画祭」(川崎市)や、金沢の映画館、伊勢の進富座でも充実した活動を行っています。今度の東京国際映画祭で開催する「全国映画祭コ



ンベンション」では「映画館の中の子ども」をテーマに、子供達に映画をどのように伝えていくのか、シンポジウムを行いますので、よろしければご参加ください。

### コミュニティシネマ支援センターの活動

各地で地域映画祭や自主上映をされている方と、「コミュニティシネマ支援センター」の活動との関わりについて、また、コミュニティシネマ賞についても伺いました。

**岩崎：**「山形国際ドキュメンタリー映画祭」では、“上映者が選ぶ一番上映したい映画”というコンセプトで「コミュニティシネマ賞」を授賞し、国内で上映する場合、経費の一部を負担しています。ささやかな金額ですが、ドキュメンタリー映画が日本国内でより多くの方に見ていただけるようにご協力したいと創設しました。

当センターでは年一回「コミュニティシネマ会議」を開催し、毎回全国から 150~200 団体が参加しています。また、各地の「映画館を再生したい」「映画祭をやりたい」「映画を上映したい」という希望に対して、どういことをすればいいのか、その地域だったら誰に相談したらいいのか、というコンサルティングも始めました。映画の貸出もしています。

### パネリストから一言

**池谷：**やっぱり山形に来ると、本当に楽しいですよ。それは出会いがあるからだと思うんですね。上映後、「香味庵」で飲んでいると若者がやってきて、まっすぐに僕の顔を見て「映画を作りたいんです」と言うんです。なかなかこういう場ってないですから、いつまでも映画祭には続いてほしいと思います。

**伊勢**：映画を作りながら、見てもらいながら仲間と一緒に続けます。山形とはまた違った意味での映画祭をやったり、山形に呼ばれなくても自分なりの映画を作り続けたりしたいと思っています。

**安岡**：確かにマーケットとしての映画祭がどうか、いろいろ考えることは非常に重要ですが、その根本にある“文化”は一朝一夕に育てられるものではありません。映画祭がマーケットとして機能するためには、粘り強くその動きを支えていかななくてはならないし、少なくとも山形ではそれをやってきたと思います。僕も後輩達、若い人達も、ここで作家としての自分を見つけられ、見つめられたし、次作をどう作っていくか、考えられました。そのことをしっかりと受け止めて未来を考えていくことが非常に重要だと思います。

**川嶋**：山形芸術工科大学の赤坂憲雄先生が「東北は誇りの持てる場所なんだよ」という「東北学」を提唱されていますが、山形国際ドキュメンタリー映画祭がある、これだけのレベルで実施でき

ているということは、東北が誇れることの一つだと思います。もしこの映画祭がなくなったら大変なことです。ですから、予算的にも大変だと思いますが、ぜひ続けてほしいと思います。何とかがんばってください。

**高橋**：山形では、第二次世界大戦終戦の年、12月にはもう米沢で映画教室をやっているんですね。当時の若い先生方が映写機を使って、映像で何かやりたいと。歴史的に自主上映も盛んですし、最近映画が多く作られています。山形には映画に熱い人達がいて、映画の状況を支えてきたんだな、と思います。「山形国際ドキュメンタリー映画祭」もこれまで、非常に多くの人に関わってきました。こうした歴史をときどき思い出しながら、山形は映画で行くぞ、と思っています。

映画祭だけではなく、もっと地域の人達と映画について語ったり、見たり見せたりという活動をやって、映画祭の活動をもっと楽しくやります。次回もまた映画祭にいらしてください。

*パネリストの皆さんや来場者のご意見、アンケート結果は今後の東北地方のコンテンツ産業の振興に役立ててまいります。ありがとうございました。*

## 4 アンケートから

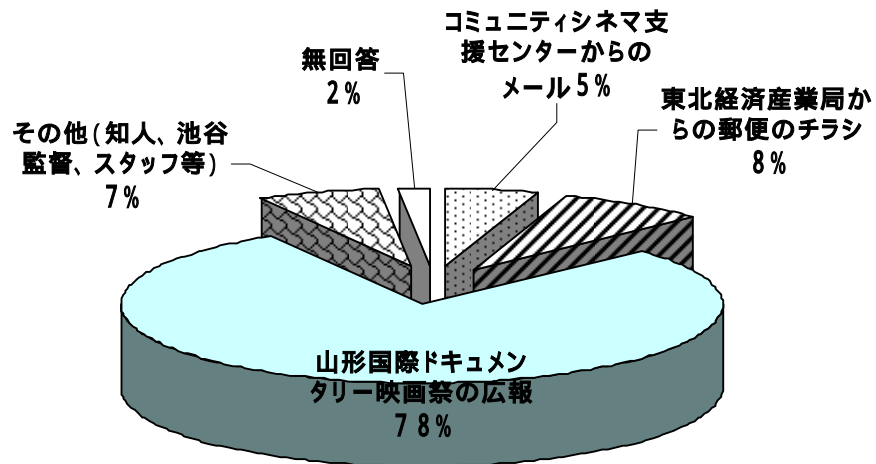
入場者：109名	アンケート回収数：61枚	アンケート回収率：56%
----------	--------------	--------------

### アンケート回答者について

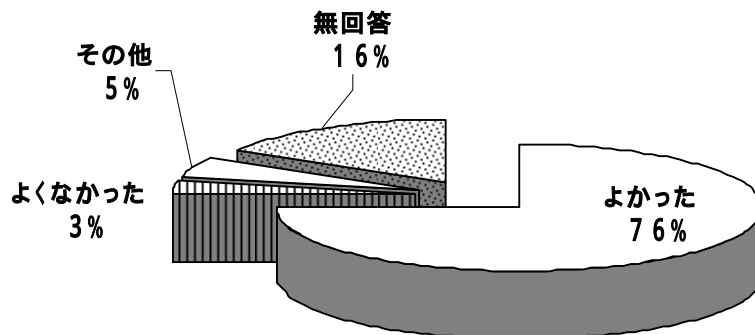
(人)

業種別 都道府県別		コ ン テ ン ツ 関 連	教 育 関 係	報 道 関 係	官 公 庁 ・ 団 体 関 係	一 般 ・ そ の 他
山形県	12	4	1	1	3	3
宮城県	1				1	
福島県	2					2
秋田県	1		1			
東京都	19	7	2	4		6
神奈川県	4	3		1		
埼玉県	1	1				
静岡県	1					1
大阪府	8	4	1	1		2
兵庫県	1	1				
京都府	3		2		1	
滋賀県	1	1				
国外	1	1				
無回答	6			1		5
合計	61	22	7	8	5	19

## シンポジウム参加のきっかけについて



## シンポジウムの内容について



奈良の映画祭スタッフの参加が話の広がりを生んでいた。

全国の映画祭スタッフはいろいろな話し合いをした方がいい。

地域映画祭の実情と将来の計画が知ることができた。

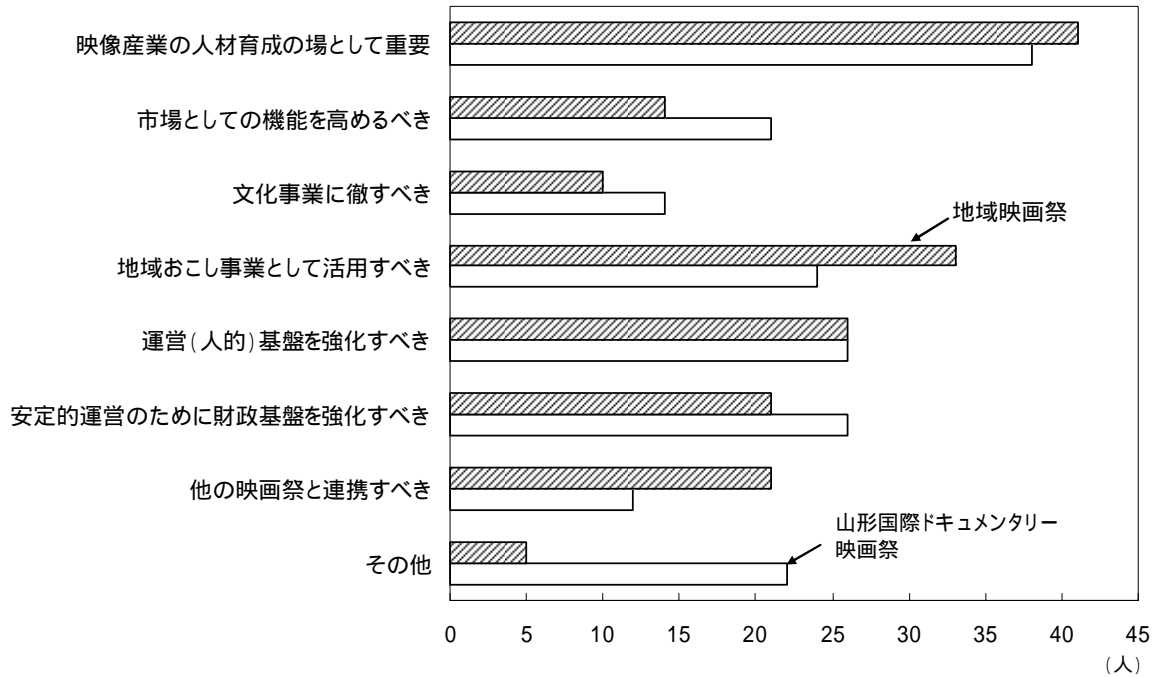
完全に無知で参加したが、地域映画祭の全体像が見れた。

地域映画祭はまだ未熟でこれからの発展に期待できると確認できた。

# 映画祭のあり方について

## 地域映画祭と山形国際ドキュメンタリー映画祭

### それぞれのあり方



複数回答のため、地域映画祭の回答人数は171人、山形国際ドキュメンタリー映画祭の回答人数は183人となる。  
山形国際ドキュメンタリー映画祭の「その他」には「ライブラリーの活用方策について検討すべき」と回答した17人が含まれる。

### 地域映画祭について

外部からどれくらい客を集めることができるか、海外からでも駆け付けたいくなる宣伝と中身を用意できるかが将来を決める。

映画祭から海外や国内へ発信する発信源とするつもりがあるかどうかがかぎをにぎる。

### 山形国際ドキュメンタリー映画祭について

10回目を数えてそろそろ脱皮する段階に入ったのではないかと。観客の増大に対応し国際化に対応し地域色と国際的な並立は難しそうだがバランスをとる必要がある。

広報に関して強化すべき。山形市外(県内で)での認知度が低い。

## シンポジウム全般、東北地域におけるコンテンツ産業について

時間的余裕も含めて、映画祭は事件であるべきだと思う。今現在、この場所で行なわれているということと、世界で今現在起きているということをも映画祭が結びつけられたらと思う。

世界に誇れる映画祭であることは間違いないので、この映画祭から一般公開、そしてヒットする作品が一本でも多く出るよう、マーケットとして充実することがこれからの課題。

子どもの観客の増加が必要である。

映画祭コンペでカンヌ映画祭等のように単にマーケット力のある作品、芸術的価値のある作品をセクションしていく方向もあるが、作品の価値はそれだけでなく、多くの人々が創造的活動にとっても小さな歩みでも、一歩でも踏み出せて参加することに価値があると思う。

優良なコンテンツが市民の誇りになるような「成果の設計」が重要であると気づいた。

映画館を地域ぐるみで守れないだろうか。

東京集中が進んでいるが、インターネット等を利用すれば東京より遙かに良い生活環境で制作が可能だと思う。国や地方自治体も長期的な視点で行動を起してもらいたい。

各県単位で県内のフィルムコミッションを組織したものが必要ではないのか。

東北各地の映画祭でこのような企画をまたお願いしたい。

スタジオを誘致して、産＋官＋民の連携、芸大生の職場の確保。

大学の研究者（教員）は世界中で活動している。映画の解説から世界の諸地域における映画祭の宣伝まで活用されることをお勧めしたい。

アフリカはコンテンツの宝庫（特にこれから）である。映画祭の国際性を高める上でもアフリカなどの地域も視野に入れた振興を進められることを期待。

各映画祭への支援を通して、マーケティングの可能性を探る等の事業が必要ではないか。山形国際ドキュメンタリー映画祭は「持続可能な発展」の好モデル

映画祭の活動がコミュニケーションツールとしてメディアリテラシーの力をつける活動として、見る、上映する、作る側が分離せず一体となって働く場を作り、それがネットワーク化し世界へ向けていくことが素晴らしいと思う。

経済産業省の今後の支持は非常に重要と思う。

各県で取り組みをするようにして欲しい。映画祭自体の「市場性」を高めるための支援を。

映画について言えば、製作者を育てること、配給を支持すること、上映者を支援すること、観客を育てることの4つが必要だと思う。どれが欠けても、文化・芸術・産業としては根付かない。

山形はコンテンツ産業に関してはかなり根付いていると思う。ただ、宣伝に関しては弱いと思う。

東京への、あらゆる面での一極集中を危惧している。東北の、山形の、山形国際ドキュメンタリー映画祭の産業振興が成功例を示すことができれば良いと思う。

# 「地域映画祭の明日を考える ～マーケットとしての可能性とは～」

現在、東北地方では特色ある様々な地域映画祭が開催されています。映画祭は重要な文化事業であると同時に、映画産業の人材育成の場、配給につながる市場であり、地域のみならず、全国のコンテンツ産業の振興に貢献する潜在性を持っています。パネリストに、近年話題の日本ドキュメンタリーのプロデューサーたち、そして東北で映画祭を主催する方々を迎え、映像産業から映画祭に期待すること、映画祭が志すことなど、映画祭と映像産業の結びつきを考えるシンポジウムを開催します。会場からも意見を募る広範な議論となりますよう、皆様のご参加をお待ちしています。

## パネリスト



池谷 薫  
Ikeya Kaoru



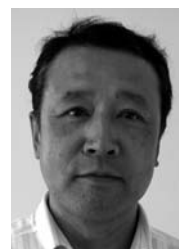
伊勢真一  
Ise Shinichi



安岡卓治  
Yasuoka Takaharu




川嶋大史  
Kawashima Daiji



高橋卓也  
Takahashi Takuya

- 池谷 薫 『蟻の兵隊』 監督・プロデューサー
- 伊勢真一 『花の夢 ある中国残留婦人』 プロデューサー
- 安岡卓治 『ガーダ パレスチナの詩』 プロデューサー
- 川嶋大史 @ff あおもり映画祭 本部事務局代表
- 高橋卓也 山形国際ドキュメンタリー映画祭 事務局長
- 司会：藤岡朝子 コーディネーター(創人舎)

2007年 10月8日 (月・祝) 15:20-17:30

- 会場 映画館 フォーラム 5 (裏面地図参照)  
山形市香澄町 2-8-1 (JR 山形駅東口徒歩 10 分) TEL 023-632-3220
- 参加費 無料
- 主催 東北経済産業局
- お問い合わせ 東北経済産業局コンテンツ産業支援室 (担当: 永田・上野)   
TEL 022-263-1194 FAX 022-215-9463  
創人舎 (山形国際ドキュメンタリー映画祭東京事務局) (担当: 藤岡)  
TEL 03-5362-0672 FAX 03-5362-0670 E-MAIL fujioka@tokyo.yidff.jp

## パネリストの紹介

## 池谷 薫 『蟻の兵隊』 監督・プロデューサー

第二次大戦敗戦後も中国に残留し、内戦参戦を強いられた日本人兵士たちの現実を描いたドキュメンタリー『蟻の兵隊』は、東京渋谷の映画館の興行記録を塗り替える大ヒットとなり、今も自主上映の申し込みが全国から届く。海外の国際映画祭でも好評を博し、カナダで劇場配給が始まった。池谷監督はNHKの番組制作を経て、自主制作・自主配給の劇場公開映画を志向した。ドキュメンタリー市場における、テレビと映画の違いについて実体験からお聞きし、映画祭の役割を考える。

●『蟻の兵隊』は10月7日(日) 22:00よりミュージズ1で上映されます。

## 伊勢真一 『花の夢 ある中国残留婦人』 プロデューサー

監督として『奈緒ちゃん』、『ルーペ』、『朋あり～太鼓奏者 林英哲～』など多くの作品を作る一方、『タイムグラバあちゃん』(澄川嘉彦監督)、『めぐる』(石井かほり監督)、『花はんめ』(金聖雄監督)、『ツヒノスミカ』(山本起也監督)など若手ドキュメンタリストのプロデュースを続ける。2003年来、大阪市の阿倍野ヒューマンドキュメンタリー映画祭企画委員長を務める。いせフィルム作品のほとんどは劇場で公開しているが、その経験から日本の興行と地方配給の課題についてお聞きし、制作者が地域映画祭にどのようなメリットを感じるのかを考える。

●『花の夢』は10月5日(金) 22:00よりミュージズ1と8日(月・祝) 13:30よりフォーラム5で上映されます。

## 安岡卓治 『ガーダ パレスチナの詩』 プロデューサー

日本映画学校の教員として『あんにょんキムチ』(松江哲明監督)『home』(小林貴裕監督)など学生の作ったドキュメンタリー作品の一般公開に尽力する一方、オウム真理教を内部から描いた『A』『A2』(森達也監督)、テレビ報道では伝わらない戦時下のイラク市民を見つめた『リトルバズ イラク戦火の家族たち』(綿井健陽監督)、パレスチナの女性の生涯に寄り添う『ガーダ パレスチナの詩』(古居みずえ監督)など話題のドキュメンタリーを積極的にプロデュースしている。世界の映画祭にも詳しい安岡さんには、プロデューサーとしての映画祭の利用価値と山形映画祭に期待することをお聞きする。

●『ガーダ』は10月7日(日) 13:30よりフォーラム5で上映されます。

## 川嶋大史 @ff あおもり映画祭 本部事務局代表

青森県出身。多摩美術大学(グラフィックデザイン専攻)卒業。広告制作会社、映画制作会社、テレビ局勤務を経て、1988年に青森県へUターン。新聞販売店経営の傍ら、各種地域づくりに参画する。縄文、格闘技、映画、ねぶたと青森県をテーマに様々なイベントを企画・運営する。平成3年度毎日郷土提言賞優秀賞受賞。また、1991年より「あおもり映画祭」を主宰。今年6～7月「@ff 第16回あおもり映画祭」より全国的にも珍しい全県的なネットワーク組織に移行する。青森県内5フィルムコミッションを含む全15団体が加盟する実行委員会の本部事務局代表をつとめる。メディアプランナー。

## 高橋卓也 山形国際ドキュメンタリー映画祭 事務局長

1989年の第一回目山形映画祭からボランティアスタッフとして中心的な役割を担い、2005年より事務局の正規スタッフとして映画祭の常駐となる。映画祭がNPO法人となった2007年春より「非営利活動法人山形国際ドキュメンタリー映画祭」の事務局長を担当する。

JAPAN 国際コンテンツフェスティバル (CoFesta)  CoFesta  
パートナーイベント

 山形国際ドキュメンタリー映画祭 2007  
YAMAGATA International Documentary Film Festival 2007

2007年10月4日(木) — 10月11日(木)

www.yidff.jp

主催 特定非営利活動法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭  
共催 山形市  
会場 山形市中央公民館(アズ七日町) など8会場  
お問い合わせ 山形事務局 TEL 023-666-4480





東北地域コンテンツ産業振興シンポジウム

報告書

平成19年11月

編集・発行 経済産業省東北経済産業局産業部コンテンツ産業支援室  
宮城県仙台市青葉区本町3丁目3番1号 仙台合同庁舎5階  
TEL 022 - 263 - 1111(代表)  
URL <http://www.tohoku.meti.go.jp/>